

# *The Plot Against America* に見る政治と家族

坂 野 明 子

## 1. はじめに

フィリップ・ロスという道具を巧妙に使う作家である。そもそもフィクションとは「虚構」、「捏造された話」という語義を持ち、「本当らしい作り話」が小説の本質だろう。だが、ロスは小説のタイトルを *The Facts* (1988) としてみたり、副題に *A True Story*<sup>1</sup> とつけてみたり、そうかと思えばフィリップ・ロスという作家が作中人物として登場したり<sup>2</sup> といった具合に、事実と虚構の境界をあいまいにし、読者を混乱させる。その混乱の中から読者は現代社会の混沌、アイデンティティ問題の複雑さ、文学という営為の意味等々を理解していく・・・これが今までのロスの小説戦略であったと言えるだろう。

*The Plot Against America* (2004) (以下 *The Plot* と表記) はそのようなロス文学の歩みの中でも、異色の作品である。Michiko Kakutani は「ロスは今まで自分に酷似した登場人物たちに別の運命を想像してきたが」、「今回作家によって別の運命を想像されたのはアメリカ合衆国である」<sup>3</sup> と述べている。1940 年の大統領選において勝利を収めたのが Franklin D. Roosevelt ではなく、アメリカの英雄 Charles A. Lindbergh であったとしたらという設定で始まるこの作品は、思い切った歴史の改変にもかかわらず、虚構の迫真性には恐るべきものがあり、ロスの小説家としての力量に改めて感服した批評家も多い<sup>4</sup>。

また、親ナチスの姿勢が明らかだったリンドバーグが大統領に選ばれた後、アメリカに反ユダヤの嵐が吹き荒れるという史実に反するストーリーから、政治的なメッセージを読み取る読者も多いことだろう。たとえば、Blake Morrison は *The Plot* について、タイトルからして 9.11 を思い起こさせると

述べ<sup>5</sup>、ブッシュ政権下のアメリカ社会と作品が描き出す 60 年前のアメリカ社会に通じるものがあると指摘する。これは 1990 年代の半ばからいわゆる「アメリカ三部作」<sup>6</sup>を発表し、第二次大戦以降のアメリカ現代史を鋭く検証してきたロスの歴史意識、政治意識の延長線上にこの作品を位置づける、理にかなった読み方と言えるだろう。

ただこの作品には「アメリカ三部作」と一つ決定的に違う要素が含まれている。それは「アメリカ三部作」の語り手が **Nathan Zuckerman**、あくまでロスが創造した作中人物であるのに対し（出生地、年齢、職業、どれをとってもロスに近いのだが）、*The Plot* の語り手は 7 歳から 9 歳のフィリップ・ロスである点である。もちろん、すでに述べたようにロスは自分の名を騙る人物を作品に登場させたこともあり、語り手のフィリップが作家の幼少期の姿であると信じることは慎重であるべきだろう。しかし、父が **Herman**、母が **Besse**、兄が **Sandy** という具合に、それぞれロスの実際の家族の名前が使われていること、彼らの 1940 年当時の年齢と登場人物の年齢がぴったり一致することなどを考えると、状況設定が途方もない虚構であるのと対照的に、語り手の少年の家族の設定については限りなく事実に近いものではなかったかと思われる。

実際、ロス自身、*The Plot* について書いた文章の中で、この作品を書くことが「30 代後半の一番元気があった頃の両親を墓から呼び戻す機会」<sup>7</sup>を与えてくれたと述べている。このことから考えても作品中の家族を彼の実際の家族に重ねることは自然なことのように思われる。ただし、家族に関する記述を、作家ロスの伝記的事実の検証に役立つという意味合いに留めておくべきではない（むしろロス研究者にとっては貴重な文献ではあるが）。というのも、作品の中核には「政治」と「家族」の二項対立があり、その構造を説得力あるものにしたのは、少年の視点から描かれた「家族」の姿なのである。ロス自身の実の「家族」への深い思いなくしてはこの作品の魅力は半減していたのではないだろうか。

本論では、作品を通して「家族」の意味合いが微妙に変化していく有り様を検証しつつ、*The Plot* が描き出した「政治」と「家族」の関係を明らかにしていきたい。

## 2. 「政治の言語」とシンプルな「家族」

*The Plot* は 9 つの章から成り立っている。各章は時系列に沿って配置されており、歴史を題材とした小説としては自然な作りと言えるだろう。「1940 年 6 月－10 月」を扱う第一章の冒頭、語り手フィリップは自分が 7 歳の頃のロス家を回想し、幸せな家族だったと述べている。大手の生命保険会社に勤める父、専業主婦の優しい母、5 歳違いの二人の息子サンディとフィリップ。周囲も皆ユダヤ系のコミュニティー（ロスの読者にはお馴染みのニュージャージー州ニューアーク Weequahic 地区）に住む一家は、友人たちとのつきあひも頻繁で、子供たちも屈託なく育っている。まだヨーロッパで 600 万のユダヤ人は殺されておらず、1 年に 1 度、「パレスチナに祖国を！」という運動で寄付金を求めにくる老人のことが、幼いフィリップには不思議でならない。だから「かわいそうにこの人は僕たちにはちゃんと国があるってことがわからないんだ」(4) と考える。このように、まだユダヤ系であることさえ意識していないフィリップだが、ここで、彼が語る「幸せな家族」(2) が父と母、子供二人のいわゆる核家族、血でつながった最もシンプルな形態の家族であることを確認しておきたい。というのも物語の進行に伴い、家族の形態が徐々に変わっていき、作品理解の鍵はそのあたりにあると思われるからである。

ともあれ、物語の始まりの時点では、「家族」は、自由の国アメリカ、移民の国アメリカで幸せを享受し、平穏に暮らしていた。しかしながら、そういう彼らの暮らしにある日激震が走った。1940 年 6 月 27 日、共和党が大統領候補としてチャールズ・リンドバーグを選んだのだ。1927 年に太平洋単独飛行を果たし、一躍アメリカの英雄となったリンドバーグは、反ユダヤの発言で知られてだけでなく、ナチス・ドイツとの関係も深く、ゲーリングから名誉勲章までもらっていた。ユダヤ系の人々が彼がこのまま大統領になってしまったらと恐れるのも当然だったのである。

大統領候補になったリンドバーグの選挙民へのメッセージは簡潔なものだった。「私に投票するか、さもなくば戦争に賛成するか」であった。時代は 1940 年。ヨーロッパではヒトラーがすでにポーランドに侵攻し、戦争が始まっていた。しかし伝統的に孤立主義的なアメリカ国民の多くは、第一次大

戦の記憶もあって、二度とアメリカはヨーロッパの戦争にかかわるべきではないと思っていた。一方、ヨーロッパ情勢を憂慮し、ヒトラーの動きに強い危機意識を抱いていたローズベルト大統領は、軍事的介入の方向に舵を切ろうとしており、議会も国民も大統領への不満を募らせていた。そこに現れたのがリンドバーグだった。上記のメッセージ、「戦争がいやなら私に投票せよ」はこのような文脈で発せられたのだった。

「戦争か自分か、どちらか一つを選択せよ」という発言は、考えてみると随分乱暴な、単純すぎる二者択一の論理である。しかし残念なことに、これは選挙戦略としては非常に効果的であった。黒か白か、勝つか負けるか、どちらかしかない、中間なんかないと強く迫られるとき、国民は論理の明快さに指導者の強さを見る。9.11 後のアメリカ合衆国大統領の姿勢が国民の強い支持を得たのはまさにそのためだろう<sup>8</sup>。そして「空想的歴史小説」*The Plot*においても、リンドバーグ候補は国民の圧倒的支持を獲得することになる。

ローズベルトに対し地滑りの勝利を収め、リンドバーグがホワイトハウスの住人になって半年たった 41 年の 6 月、ロス一家はかねてから計画していたワシントン D.C. 旅行を実行した。父親ハーマンは息子たちに対し、「FDR が大統領でなくなっても何も変わっていないことを確信させたかった」(55) が、実際には行く先々でアメリカ社会がすっかり変わってしまったことを思い知らされることになる。すでにチェックインしていたホテルから追い出され、リンカーン・メモリアルで反ユダヤ主義的な言葉を投げかけられといった具合で、一家は次々と不愉快な体験をする。ところでここでこの状況下の父ハーマンの言動に注目したい。たとえばホテルから追い出されそうになった彼は、フロント係りが呼んだ警察官に対し、リンカーンの the Gettysburg Address 中の言葉「すべての人間は平等に作られている」を引用して、ホテル側の不当な行為を糾弾するが、彼のこの言動には二つの側面があると考えられる。一つは彼が「政治の言語」を語っているという点、もう一つは、彼が、偉大な指導者、自分が尊敬できる人物、ある意味で「父」にも匹敵する人物を引用しているという点である。

父ハーマンはそもそも「政治」に関心があり、「政治の言語」を多用するタイプの人間である。ユダヤ系アメリカ人としてそれは当然のことなのだろう

が、現在の政治状況に不満やるかたない彼は首都ワシントンの旅行中、反リンダバーグの発言を繰り返す。そしてその見返りのように次々と反ユダヤ主義の仕打ちを受けたとき、彼の反撃の武器は「アメリカ民主主義の原理原則」である。しかし、それはあまりに原理原則的すぎて、リンダバーグのレトリックとしての「政治の言語」（「戦争か自分か、どちらか一つを選択せよ」）の前ではいかにも無力なのである。

そしてもう一つの点、自分で闘うのではなく、「父」的存在に頼ろうとしている点も問題だろう。彼は FDR を熱烈に支持し、リンカーンを心から尊敬している。政治家を応援し、歴史に名を残す優れた指導者に敬愛の念を抱くことはデモクラシーの国の市民として好ましいことだろう。しかし、父ハーマンの場合はいささか度が過ぎている。ここには「強い父」に守られたいという「子」の気持ちが見え隠れしてはいないだろうか。それはある意味で彼がまだ「父」になりきれていないことの証しとは言えないだろうか。

以上の2点から、父ハーマンが急激に変化していくアメリカ社会に上手く対処できるとは考えにくい。父、母、兄、フィリップの小さな家族がこの後、時代に翻弄されていくのはその意味で必然だったと言えるだろう。

### 3. 破綻の始まり

実際、41年の後半になると、リンダバーグの政治が直接的にロス家に影響を与え始める。すでに「アメリカの宗教的・人種的少数派の人々を社会の主流に合流させていく」（85）ために Office of American Absorption (OAA) という組織を立ち上げていたリンダバーグは、この頃その一環として Just Folks というプログラムを立案した。これは都会に住む宗教的・人種的少数派の若者を夏休み中農業地域に送り出し、アメリカの伝統的な暮らしを知ってもらうというプログラムで、なにやら中国の文化大革命を思わせる内容だが、フィリップの兄サンディはこれに参加することを望んだ。もちろん父は猛烈に反対した。しかし、ここで母の妹のエヴェリン叔母が強力な助っ人として登場する。

母親（フィリップからすると祖母）の面倒を一人で見てきたエヴェリンは小学校の教師をしている 31 歳の独身女性である。結婚願望を抱く彼女は、

リンドバーグのユダヤ人側協力者、63歳の有名ラビ **Bengelsdorf** と付き合い、ついには結婚するに到るのだが、彼女と **Bengelsdorf** にとってサンディは格好の広告塔候補であった。一方、サンディは空疎な理想論的「政治の言語」しか語らない父に失望しており、いわば両者の利害は一致した。さらにフィリップの母が妹に対し、母親の面倒を見させ青春を無駄に過ごさせてしまったと負い目を感じていて、夫とエヴェリンの仲介役をつとめたこともあって、サンディは念願どおりケンタッキーのタバコ農場でひと夏を過ごすことになった。2 ヶ月後帰ってきたサンディは見違えるほどたくましくなり、声変わりも始まっていて、まだ幼いフィリップには別人のように見えるのだった。実際、サンディは、久しぶりにあった長男を抱きしめようとする母親を露骨にいやがり、サンディが「小さくまとまった核家族」の枠から離脱し始めたのは明らかだった。

そして父ハーマンにとっておそらく長男の反抗以上に辛かったのは、甥のアルヴィンが身障者になってしまったことだろう。アルヴィンはハーマンの長兄の息子で、その兄が早く亡くなり、さらに 13 歳のときに母親まで亡くしたので、その後ハーマンが面倒を見て、特にハイスクール時代には不良仲間と付き合っていたのを必死に説教して定職につけたのだった。つまりロス家にとってはアルヴィンはもう一人の息子のような存在だった。だから、しばしばロス家に夕食を取りにきていたアルヴィンが、恩義のある叔父ハーマンから政治的影響を受けたのは自然ななりゆきだったと言えるだろう。食卓で叔父の政治談議を耳にし、痛烈なリンドバーグ批判を展開するユダヤ系ジャーナリスト **Walter Winchell**<sup>9</sup> の番組と一緒に耳を傾けているうちに、アルヴィンはヨーロッパのユダヤ人を救わなくてはならない、ヒトラーと戦わなくてはならないと強く思うようになった。しかし、ヒトラーと「アイスランド合意」（不戦条約）を結んだリンドバーグがヨーロッパのユダヤ人のために立ち上がるはずはなく、彼はついに決意し、カナダ軍に志願して、ヨーロッパ戦線に出かけたのだった。

だが前線に送られてまもなくアルヴィンは片脚の膝から下を切断する大きな戦傷を負ってしまう。イギリスの病院に収容され、後にカナダの病院に移送されたアルヴィンを、強行軍のドライブ（ニュージャージーからモントリ

オールまで)で一人見舞い、帰ってきた父は、アルヴィンの様子を母に語りながら泣きだし、なかなか泣き止まなかった。それはフィリップにとって初めてみる父の無力な姿であり、同時に、「家族」が否応なく変っていく最初の兆候でもあった。すでに母はアルヴィンが帰ったらいろいろ物入りだからと仕事をはじめ(つまり有能な専業主婦であることを止め)、兄サンディは放課後リンドバーグのすばらしさを他のユダヤ系少年たちに宣伝するプログラムに参加して不在がちであり、父のこの姿と合わせて、フィリップは家族の一つの時代が終わったことを実感する。そして「二度と同じ子供時代には戻れない」(113)と考えるのだった。

とはいえ、父ハーマンがひたひたと押し寄せる変化の波に無抵抗だったわけではない。むしろ早々にアメリカから逃げ出すことを考えた友人たちより、戦う姿勢ははっきりしている。ただ、父が同じ「言語」を用い、同じ戦い方を続けようとしたことは問題だろう。それを明快に表しているのが、**Bengelsdorf** との対話である。アルヴィンの負傷の知らせに心傷めている一家を、ある日、叔母エヴェリンと婚約者 **Bengelsdorf** が訪問する。**Bengelsdorf** はアルヴィンのことを、リンドバーグが大統領としてこの国を戦争から護ってくれているのだから、「行く必要もなかったのにわざわざカナダに行って志願し、負傷してしまったことが悲劇」(108)だと語って、父の心をさらに傷つける。父は、独ソ不可侵条約が破られてしまったことをあげ、リンドバーグがヒトラーと交わした条約なんて反故にされかねない、ヒトラーなんか信じられない、いずれアメリカも独裁政治の国になるだろうと反論するが、**Bengelsdorf** は慌てず騒がず、自信たっぷりに次のように語る。そもそもリンドバーグは民主的な選挙で選ばれたのであって、その意味で独裁的ということはいえぬ。さらに、ニュールンベルグ法がユダヤ人の市民権を奪い、国家からユダヤ人を排除しようとしたのに対し、リンドバーグが **OAA** でやろうとしているのは、ユダヤ人をアメリカのメイン・ストリームに迎え入れることである。サンディがケンタッキーに出かけたのはそういう意味ではないか・・・このやりとりから読者は気づくだろう。父ハーマンの「政治の言語」は正しいかも知れないがストレートすぎる、真面目すぎる。それに対し、**Bengelsdorf** の「政治の言語」(それはリンドバーグ政権が使う言語でもある

のだが)は正しさを巧妙に「演出」し、相手に合わせて変幻自在に変化する言語であって、従って、前者は後者を決して打ち破ることはできない、正攻法で攻めていけばいくほど、後者のレトリックに簡単に飲み込まれてしまうだろう、と。すなわち、父の理論としての「政治の言語」は現実の「政治の言語」の前でなすすべもないのである。しかし父ハーマンはこの時点では自分の無力を決して認めようとせず、すべてを相手側、敵側の責任にし続けるのだった。

#### 4. 家族の危機

父ハーマンの駆使する「正しい政治の言語」が「現実の政治の言語」に対し抵抗の礎とは少しもなりえず、結果的に「幸せな家族」が解体し始めたことを以上に見てきたが、1942 年に入ると解体のプロセスはさらに加速していった。

まず、カナダから帰還したアルヴィンが一家の暮らしを変える。それまでサンディが使っていたベッドをアルヴィンが使うことになり、フィリップは否応なくアルヴィンの補佐役にされてしまう。幼いフィリップにとって、アルヴィンの膝から下を切断された足は恐怖の対象でしかない。特に切断部(stump)と義足(prosthesis)が合わないため切断部が膿んで苦しがる姿に耐えられない思いを募らせる。ただ、リンドバークを信奉しているサンディに敵意を抱くアルヴィンも、フィリップには親しく接し、やがて二人の間に友情のようなものが育っていく。

だが、父ハーマンは、養子とも言うべきアルヴィンが身体の不具合を理由にして博打ばかりして定職につかないことが我慢ならず、相変わらず「正しい生き方」を説いてアルヴィンを責めたてる。恩人の強い言葉にこれ以上逆らえないと観念してアルヴィンは仕事につくが、ある日職場に FBI が現れ、大統領の意向に反し戦争に出かけた、つまり反アメリカの行動をした彼が当局から疑われていることが判明する。その結果、解雇され、その日のうちにアルヴィンはニューアークを出て行き、フィラデルフィアのユダヤ系マフィアの仕事につく。すなわち、かつて父が語った「政治の言葉」がアルヴィンの人生をまたしても狂わせてしまうのである。



父の無力が明らかになるにつれ、二人の息子はそれぞれのやり方で父から、すなわちロス家から離れていこうとする。兄のサンディは叔母エヴェリンと **Bengelsdorf** のカップルにますます接近し、リンドバーグの対ユダヤ戦略の推進役を積極的に勤めていく。この頃の兄の姿は「ウエストポイントの士官候補生のように」(182) だったと語られ、多くの読者はヒトラー・ユーゲントを連想することだろう。そして、ある日、ナチス・ドイツの外務大臣も出席する、アメリカとドイツの友好関係を祝うパーティがホワイトハウスで開かれることになり、**Bengelsdorf** の影響力が行使されて、若干 13 歳のサンディにも大統領から招待状が届く。自分の息子がナチスの閣僚と同席することなど到底許せない父は、会社を休んでまで息子にヒトラーとユダヤ人の関係を諄々と説くが、サンディは「迫害コンプレックス」や「ゲットーユダヤ人根性」という言葉を使って反発し、ついには父のことを「ヒトラーより独裁者」(193) とまで言い切るのだった。

そして弟のフィリップを捉えたのは孤児願望だった。最初はユダヤ系であることの意味さえ理解していなかったフィリップだったが、一家に次々に降りかかる出来事がユダヤ系であるゆえと知り、ユダヤ人でなくなれば、孤児になれば、こういう試練と無縁でいられるだろうと幼いなりの理屈に到達する。特にリンドバーグ政権の新しい政策 **Homestead 42** (マイノリティの人々をアメリカの中西部などに移すという処置) により、父のケンタッキーへの強制的転勤 (**relocation**) が決まり、両親が狼狽する姿を見るにいたって、彼の家出の決意は固いものになっていくのだった。

**Homestead 42** は合衆国の形成に貢献した **Homestead 1862** に倣った法律で、政府の説明では、多様な宗教・エスニシティの人々が交じり合い、これによってアメリカはますます一つの国としてまとまるだろうという。しかし父の解釈では目的はユダヤ人コミュニティを分断し、政治勢力として力を削ぐことだと言う。どちらであれ、ケンタッキーのような見知らぬ土地に住むのは耐え難く、それ以上に両親の姿に自分を護ってくれる強さを見出せず、フィリップは家出決行のための準備を始めるのだった。

興味深いのは、いや、ある意味で当然のことかも知れないが、フィリップはこのとき救いをキリスト教徒の世界に求めようとする。作品中しばしばキ

リスト教への言及があり、たとえば、放課後の遊びとしてクリスマス・ツリーを購入した男性（すなわちキリスト教徒）を友達と一緒に追跡したりしているが、これはユダヤ人だから苦しい目に遭うのなら、クリスチャンになればいいという子供の論理が働いたからだろう。そして家出決行の際にも、彼が目指したのは近くにあるカソリックの孤児院だった。ただし、孤児院の庭に農耕用の馬がいて、馬の足の間をすりぬけて建物に近づこうとしたフィリップは馬に蹴られて、頭に血腫ができ、意識不明になってしまう。

家出はこうして失敗するが、サンディだけでなくフィリップまでが両親に背を向けたことは、家族の崩壊が一段と進んだことを示している。そして家族がばらばらになっていくことを防げない父は、結局ケンタッキーへの転勤を拒否して、長い間勤めてきた大手生命保険会社を辞め、兄が経営しているマーケットのトラック運転手の職につく。それまでスーツにネクタイ姿だった父が、作業服姿になり、夜働き朝帰ってきて（眠りにつくためとはいえ）ウィスキーを飲むようになったことはフィリップにますます「家族の解体」を実感させることになった。

ところがこの時点でも父が考えつくことと言えば、Walter Winchell に自分たちの窮状を訴える手紙を書くことであり、母はそんなことをすれば手紙が FBI に渡り、さらに危険なことになるだけだと論じ、対案としてカナダへの移住を提案する。これに対し、父は “This is our country!” (226) と叫び、母は “not anymore. It's Lindbergh's” と言い返す。父と母のこのやりとりは、今にいたってなお父が「われわれの国」といった原則論的な「政治の言語」を使用していること、また Walter Winchell のような「父」的人物に頼ろうとしていること、つまり以前となんら変わっていないことをはっきりと示している。だが、作者はここで、父自身、「家族を（かくも）献身的に愛しているのに、家族を護れない」自分の姿を「屈辱的にはっきりと」(226) 認識したとも書き込んでおり、父のこの自覚が家族にとって一つの転機になり、今後あらたな家族像が生まれる可能性があることを示唆している。

## 5. 反ユダヤの嵐と家族の再生

*The Plot* の後半部、章で言えば 7 章から 9 章までは、アメリカ社会に反ユ

ダヤの嵐が吹き荒れ、その状況下で、壊れかけていた「家族」が形を変えつつも再生する様子を描いている。ところで以下に説明するように、家族の再生を可能にしたのは「家族ネットワークの言語」を通してであった。言うまでもなく「家族ネットワークの言語」は本論の文脈では「政治の言語」と対立するものとして想定される。では「家族ネットワークの言語」とはどういうものだろうか。それを理解するために、まず、ロス家と同じアパートの階下に住んでいたウィッシュナウ家の運命について語らなくてはならない。

フィリップの父と同じ生命保険会社に勤めていたウィッシュナウ氏は、体調を崩し長いこと臥せていたが、結局亡くなり、今はウィッシュナウ夫人が同じ保険会社に勤め、生計を立てている。ウィッシュナウ家の息子セルダンはフィリップと同年齢、チェスが得意だが不器用なところのある少年で、セルダンはフィリップに好意を抱いているが、フィリップはセルダンが鬱陶しい、そういう関係だった。父ハーマンのケンタッキーへの強制転勤の話が持ち上がったとき、フィリップはエヴェリン叔母を密かに訪ね（すでに母が彼女との縁を切っていたので）、政治的影響力を持つ *Bengelsdorf* に、父の代わりにウィッシュナウ夫人をケンタッキーに移すよう会社に働きかけてもらいたいと頼み込む。結果、フィリップの願いは受け入れられ、ウィッシュナウ夫人とセルダンはケンタッキーへ移り住む。まもなく、全米各地で反ユダヤの暴動が起き、ウィッシュナウ夫人は暴動の一つに巻き込まれ、命を落としてしまう。

以上の説明から明らかなように、父に続き母をも失うというセルダンの悲劇の責任の一端はフィリップにある。フィリップもそのことはわかっている、罪の意識におののき、いかにも子供らしくアパートの地下室にウィッシュナウ夫人の幽霊が出るのではないかと怖れたりする。一方で彼は別のある出来事を繰り返し思い出し、申し訳なくせつない気持ちでいっぱいになる。その出来事とは物語の始まった1940年よりもさらに前のことで、この日幼いフィリップはウィッシュナウ家に遊びに行き、トイレを借りたもののドアが開かなくなってパニックに陥ってしまう。ウィッシュナウ夫人はそういうフィリップにドア越しに優しく根気よく話しかけ、ドアを開けるためにすべきことを一つ一つさせようとしてくれた。さらに、実はドアはもともと開いてい

て、ただ強い恐怖心で反対方向に押していただけたことが判明したときも、それを言おうとしたセルダンを制し、ウィッシュナウ夫人は泣きじゃくるフィリップをただやさしく抱きしめてくれたのだった。

ウィッシュナウ夫人とフィリップのこのときのやりとりは非常に生き生きと描かれていて Allan Cooper によればそれはロスの耳のよさを証すものだという<sup>10</sup>。それにはまったく異論がないが、ここではウィッシュナウ夫人が用いる「言語」の質に注目したい。恐怖心から錯乱状態に陥っている幼い男の子に語りかける彼女の「言語」には、母のやさしさ、強さが溢れており、父ハーマンの原則論的「政治言語」とも、リンドバーグ政権が使用するレントリックとしての「政治言語」とも異質のものである。これをとりあえず「家族ネットワークの言語」と名づけることにしたい。

ところで、この「言語」を「母の言語」ではなく「家族ネットワークの言語」と命名するのは、作者ロスがこのエピソードに関連して、ウィッシュナウ夫人のことを“another watchful member of the local matriarchy whose overriding task was to establish a domestic way of life for the next generation” (256-7) と述べていることと関連している。母親の愛がしばしば自我の延長としての子供を対象にし、その意味で自己中心的なものであるのに対し、ここに見られるのは他人の子、広く「次世代」への気遣いである。しかもロスはそれは多くの母親に共有されたものだという。であれば、そこには目に見えないネットワークが生まれるだろう。個別の家族は個別の家族でありながら、次世代を護ろうという力が働くことによってネットワークとして繋がるのが可能だろう。それぞれの家族の力は弱くとも、合わさることによって、外部から迫る「政治」の力に対し内側から抵抗する確かな力が生まれるだろう・・・そういう意味で、ウィッシュナウ夫人がフィリップに対して使った言葉を「政治の言語」に対抗しうる「家族ネットワークの言語」と考えるのである。

作品中「家族ネットワークの言語」を使用するもう一人の人物は、フィリップの母ベスである。反ユダヤ主義の暴動が各地で起こり、特にウィッシュナウ夫人の住むケンタッキーがひどいことを知った母は、かつての隣人を心配し、ウィッシュナウ夫人に電話をかける。電話に出たのはセルダンで、母親

が帰ってこないことを心配し、パニック状態になっている。母ベスはセルダン  
を落ち着かせようと何か食べなさいと指示し、冷蔵庫まで行かせ、何が入っ  
ているかを報告させ、トーストの作り方まで教える。この間どんどん時間は  
過ぎ、いつもだったら長距離電話代を心配する母だが、このときばかりは全  
く気にせず、子供を安心させることだけに専心し、一方で長男サンディが  
Just Folks のプログラムで世話になったタバコ農家 Mawhinney 家に電話を  
して、自分たちがセルダンを必ず引き取りに行くから、今夜一晩彼を引き受  
けてくれないかと頼みこむのだった。

この一連のエピソードでベスが発する言葉はまさに「家族ネットワークの  
言語」、ウィッシュナウ夫人がフィリップに投げかけた言葉と同質のものであ  
る。状況の深刻さに大きな違いがあるものの、ウィッシュナウ夫人がそうで  
あったように、ベスはセルダンがなすべきことを具体的に丁寧に指示してい  
く。抽象的な言葉の応酬に陥りがちな「政治の言語」と、「家族ネットワーク  
の言語」はこの点で大きく違っている。さらにベスが、ウィッシュナウ夫人  
に非常事態が生じたのだらうと冷静に判断し、駆けつけられない距離ではな  
い Mawhinney 家に（ユダヤ系ではないのだが）セルダンを一時的に預ける  
ことを思いつき、電話をして頼んでいる点も注目に値する。それは大人とし  
て次の世代のためにできることはすべてやろうという姿勢であり、この簡潔  
で愛のある現実主義こそ「家族ネットワークの言語」の特徴と言えるだろう。

ところで奇妙に聞こえるかも知れないが、「家族ネットワークの言語」は必  
ずしも「ことば」である必要はない。自身の思想信条や感情からではなく、  
次の世代を護り育てるために行動するのなら、「行動」もまた「家族ネットワ  
ークの言語」になりうる。*The Plot* の最終部分は、今までもっぱら「政治の言  
語」の人だった父ハーマンが孤児になってしまったセルダンを救済するため  
に「行動」し、「家族ネットワークの言語」の人に変貌していく過程を描き出  
している。

母ベスがアレンジして Mawhinney 家に預けられていたセルダンを引き取  
るべく、父ハーマンはサンディとともにケンタッキーへ向かって出発した。  
アルヴィンをモントリオールの病院に見舞ったときと同様の長距離ドライブ  
だったが、今回、距離以上に問題だったのが国中にみなぎる反ユダヤの気分、

暴動の気配だった。だからイタリア系の隣人から自分のピストルを持って行くように言われた時、父はすなおにそれを受け取っている。実際この旅はさまざまな困難を伴った。母を失って動揺が激しいセルダンはドライブの途中、幻覚に苦しめられただけでなく、下痢と嘔吐の症状を繰り返し、そのたびに車を止めなくてはならなかった。また、運転する父も身体の不調に苦しんでいた。実は父は数日前に久しぶりに訪ねてきた甥のアルヴィンと口論し、父としては珍しく腕力に訴え、結果として顔に何針も縫う怪我をしたのだが、ドライブ中この傷が膿み始めたのである。

周囲に漂う反ユダヤの緊迫感、ピストルを所持していること、そして傷の痛み、これらの状況から語り手フィリップはこのときの父が“as close as he would ever come to the fear, fatigue, and physical suffering of the frontline soldier” (355) であったと表現している。「前線の兵士の恐怖と身体的苦痛」を体験する父のこの姿は、かつてリンカーンの「言葉」を錦の御旗のように振りかざしていた父の姿となんと違っていることだろう。父は今一兵士として次の世代のため、身を挺して戦っている。このとき父は、長距離電話でやさしくてきばきとセルダンに話しかけていた母に負けないうらい立派な「家族ネットワークの言語」の使い手に変貌していると言えるのではないだろうか。

こうして解体しつつあった家族が、再生の方向へ転じる。あれほど両親に距離を置いていた兄サンディも、反ユダヤ主義の嵐が吹き荒れるのを見聞したためだろう、セルダンを引き取るドライブに同行し、父を助けている。これも家族再生の一つの表れであるだろう。そうなれば残るはフィリップだが、フィリップについて語る前に我々は再生された家族がリンドバーグ出現以前の「シンプルな家族」の単純な復元ではないことを確認しておく必要があるだろう。

1940年の「幸せな家族」とその後の「再生家族」を隔てるもの、それは「傷」である。一番大きな傷はもちろん、アルヴィンの戦傷、膝から下を切断された脚だろうが、物語の進行に伴い、フィリップの頭にも父の顔にも一生消えない「傷」が残ることになる。ケンタッキーへのドライブ中、父の顔の縫合部分が膿みはじめたことは先に述べたが、譫妄状態のセルダンに鎮静剤を処

方してもらう必要から病院に立ち寄った父は、自身の傷も再度縫ってもらうことにした。しかし器用とはいいがたい医者だったために、父の顔には深い傷跡が残った。まさに「前線で戦う一兵士」だったことを証明する傷跡と言えるだろう。一方、フィリップも孤児院に逃げ込もうとして馬に蹴られた際、出血し、18針縫う治療を施され、傷跡は一生残ることになったのである。

7歳のフィリップが物語の始まりの時点で「自分たちは幸せな家族である」と言い切ったとき、家族の中に傷を持った者は一人もいなかった。だが物語終了時の1942年10月時点では、アルヴィンも含めれば3人が身体的に傷つき、心の傷を入れるなら家族全員が傷ある身となっている。ただ、ここで忘れてならないのは、負った傷は手当てされ、たとえ傷跡が残っても人は生き続けるという点である。さらに、傷を手当てするのは基本的に本人ではなく他者であるという点も重要だろう。アルヴィンの脚を例にとるなら、「切断部」には「義足」がつけられ、本人が「義足」に慣れ、精神的に受け入れられるまで、周囲の人が懸命に気遣い、助けている。実際小さなフィリップも一再ならずアルヴィンに肩を貸したのだった。その意味では「義足」は「物体」であるだけでなく、アルヴィンをたすける「周囲の人々」をも含意すると言えるだろう。

「傷」は痛みを伴うかもしれない。「傷」は傷跡を残すかもしれない。しかし、「傷」は通常と異なる強い力で人々を結びつけもする。たとえば、反ユダヤの嵐が吹き荒れる中、ロス家はイタリア系やアイルランド系の家族に助けてもらっている。一方、心に深い傷を負ったセルダンについては、母方の伯母に引き取られるまでの10ヶ月間、ロス家が世話をして助けている。このように「傷」は相互扶助のネットワークを作り出し、「家族ネットワークの言語」と相俟って、従来のシンプルな核家族の枠を超えた大きな枠組みへと家族を再生させるのである。

そしてフィリップである。かつて彼は孤児願望に捉われていた。それは自分を護ってくれない両親に背を向けるという、子供らしい自己中心性の顕現と解釈できるが、物語の最終部分で、皮肉にも彼は孤児セルダンの世話役となっている。そして、セルダンを「切断部」、自分を「義足」(362)と規定する。かつて、切断部が膿み、痛がるアルヴィンをあれほど気味悪がってい

たことを思えば、フィリップがこの言葉を、単純に美しい相互扶助関係の意味に使ったのではないことは確かである。だが、心の安定を欠いて鬱陶しさを増したセルダンに対し、以前のように見知らぬ土地に追いやりとするのではなく、積極的に「義足」の役を引き受けようとしていること、そのことには大きな意味があるように思われる。頭に傷跡の残る今のフィリップは、他者の「傷」に向き合う用意があり、できるだけのことをする気持ちがある。

「義足」という言葉はそういう彼の心境、彼の成長を表していると言えるだろう。また、「義足」は自然な足ではないという意味で、血の繋がりだけから成り立つ「自然家族」とは違う、周囲に広がりを持つ「再生家族」の比喻にもなりえている。いずれにしろ、フィリップはいま、相互扶助ネットワークの一翼を担おうとしている。こうして彼もまた「家族ネットワークの言語」の使い手になったのである。

## 6. むすび

以上見てきたように *The Plot Against America* は、「政治の言語」に翻弄され解体の危機に瀕した家族が、「家族ネットワークの言語」を通して「傷」を癒し、大きな枠組みの「家族」へと再生していく物語となっている。そして家族の再生に合わせるかのように、政治の嵐も収束していく<sup>11</sup>。そういう意味で、この作品は私たちに「政治の言語」の恐ろしさだけでなく、「政治の言語」に絡め取られないためには何が大事かも教えてくれていると言えるだろう。

情報化の進む中、「政治の言語」はむしろ単純さの度合いを強め、私たちは「政治の言語」の影響力が増大しつつある時代に生きている。したがって、この作品が発するメッセージは今日ますます重要である。私たちは「政治の言語」の華麗なレトリックに惑わされてはならない。「政治の言語」が私たちを傷つけうるものだということに自覚的でなくてはならない。そして、仮に傷ついたときは、自身の傷と他者の傷、双方を直視しなくてはならない。ロス家がそうであったように、「傷」を介したネットワークは私たちに生き続ける勇気を与えてくれるのだから。微力なものでも集まれば確実に抵抗の力になりうるのだから。そしてなによりもこの作品の声に耳を傾けることは、「政



治の言語」が暴走するのを防ぐ力につながりうることだろう。ロスの「空想的歴史小説」は間違いなく現代の私たちへの警告となっているのである。

## 注

- 1 *Patrimony: A True Story* (1990)
- 2 たとえば *Operation Shylock* (1993) では、作中人物フィリップ・ロスとフィリップ・ロスにそっくりのペテン師が登場している。
- 3 Kakutani, Michiko. “A Pro-Nazi President, a Family Feeling the Effects.” *New York Times*. September 21, 2004
- 4 たとえば William E. Engel は書評で、この作品をロスが “a world-class novelist” であることを証明するものだとして述べている。“Philip Roth Comes of Age.” *Swanee Review*. Winter 2006. Vol. 114
- 5 Morrison, Blake. “The relentless unforeseen.” *The Guardian*. October 2, 2004.
- 6 *American Pastoral* (1997), *I Married a Communist* (1998), *The Human Stain* (2000) の三作品がアメリカの第二次大戦後を描き出しており、批評家たちによって「アメリカ三部作」と呼ばれるようになった。
- 7 Roth, Philip. “The Story Behind *The Plot Against America*.” *The New York Times* September 19, 2004.
- 8 Elaine B. Safer はリンドバーグの飛行服が、イラク戦争開始 2 ヶ月後空母上で “Mission Accomplished” と宣言したブッシュ大統領を思い出させると述べている。Safer, Elaine B. *Mocking the Age: The Later Novels of Philip Roth*. Albany: State University of New York Press, 2006. 187.
- 9 Walter Winchell (1897-1972) はハースト系の新聞のコラムで人気が出ただけでなく、作品中にもあるように辛口のラジオ・ニュースキャスターとして絶大な人気を誇った。早くからヒトラーを批判し、FDR を支持し、リンドバーグを批判した。
- 10 Cooper, Allan. “It Can Happen Here, Or All in the Family Values: Surviving *The Plot Against America*.” Royal, Derek P. ed. *Philip Roth: New Perspectives on an American Author*. Westport, Connecticut: Praeger, 2005. 241-253.
- 11 作品の最後でリンドバーグは飛行中に行方不明になり、必死の捜索にもかかわらずついに発見されず、急遽実施された大統領選挙で FDR が再び合衆国大統領に選ばれ、吹き荒れた反ユダヤの嵐も止むのである。

## 引用文献

Roth, Philip. *The Plot Against America*. London: Jonathan Cape, 2004.

## 参考文献

Bloom, Harold. ed. *Philip Roth*. New York: Chelsea House, 1986. Rev. ed.  
2003

Royal, Derek P. ed. *Philip Roth: New Perspectives on an American Author*.  
Westport, Connecticut: Praeger, 2005.

Safer, Elaine B. *Mocking the Age: The Later Novels of Philip Roth*.  
Albany: State University of New York Press, 2006.

Shechner, Mark. *Up Society's Ass, Copper*. Madison: The University of  
Wisconsin Press, 2003.

Halio, Jay L. and Siegel, Ben. ed. *Turning Up the Flame: Philip Roth's  
Later Novels*. Newark: University of Delaware Press, 2005.

本稿は専修大学研究助成による研究成果の一部である。